

宮城教育大学
新田 秀樹 教授

札幌市出身。1981年宮城県美術館設立準備室を経て同館学芸員。1992年から宮城教育大学。2005年から「仙台視覚芸術振興ネットワーク(SCAN)」のコーディネーターとして「五感の都市へ:仙台芸術遊泳」の企画運営に関わる。2012年から仙台市市民文化事業団評議員、2013年から附属小学校校長。



鑑賞から体験するものへ

仕掛けられたアートの企みに触れる。

美術館を飛び出したアートたちは、伝統工芸を現代的なデザインの商品に変えたり、外からの人的交流を生み出す起爆剤にまでなっていました。あちこちに旅に出たくなるようなパブリックアートのお話をうかがってきました。

先生のご専門について教えてください。

大学では美術史や美術理論分野を担当しています。以前はアートマネジメントの授業もやっていたのですが、教職免許取得には必要がないのでなくなりました。以前はそういった、学校以外でアートと関わっていく分野に就職していく学生もいたのですが、日本ではそういう職業で食べていける土壤がありません。

私の研究は、ひとつはミュージアム出身なので美術館関係のこと。それからパブリックアートと言って、美術館の外で日常生活環境とアートを結びつける分野です。仙台で言えば「彫刻のある街づくり」など、芸術を使って地域づくりやまちづくりをする分野ですね。そういう流れは、宮城県よりも芸術大学のある山形県のほうが、自治体も大学も熱心です。仙台には芸術大学はないですが、宮城教育大学の美術科や東北生活文化大学がそれをカバーしています。

先生は以前宮城県美術館におられたわけですが、美術館では何か子ども向けの催しなどはありますか。

保育園や幼稚園、小学校の団体向けのワークショップや移動創作室など、普及部を中心にいくつかメニューがあります。ただ一般の来館者には活動が見えにくい面があるかもしれませんね。絵本原画のコレクションも充実していますが、展示会のラインナップからは宮城県美術館にはあまり、子どもをターゲットにしてお客さんとして育てるといった強いコンセプトは感じられません。

だからお客さんの年齢層が上がってきています。この先、若い人たちにもっと興味を持ってもらうにはどうすればいいのか、県では現在、美術館リニューアルの懇談会を作ってプランを練っているの、そこでもっと観客層を広げるアイデアが出てくれば面白いですね。

2005年の「仙台芸術遊泳」は、仙台市内の美術館やギャラリー、カフェ、気仙沼のリアス・アーク美術館まで一緒になったイベントだったそうですが。

ひとつの美術館だけでなく、地域のミュージアムが連携することにより、アートが人々の感性を揺さぶり、さらに街が共鳴するイメージ。それが2005年から始めた「五感の都市へ-仙台芸術遊泳」でした。メディアテークが、そういう地域のミュージアムのネットワークを積極的に進めていきたいという希望が強い施設なので、補助金を貰って隔年で3回ほどやりました。

その時にできたネットワークを母体にしてSMMA(仙台・宮城ミュージアムアライアンス)という組織ができました。アートに限らず、同じテーマで展示会をやることによって、1館だけでは見えにくけれど、束になるとこういう資産が仙台市にあるということがわかりやすい。広報効果もあるし、集客アップも狙えるということで作られた組織です。

12月に地下鉄東西線が開業しますが、東西南北の地下鉄沿線沿いにはかなりのミュージアムがあるので、その交通体系を上手く使えるような仕掛けが欲しいですね。そこを結んでフリーで行けるような周遊チケットを

出すとか、どこかに子どもアートセンターのような施設ができて、親も子どもも行けるような都市づくりが実現できるといいなと思います。

このところあちこちで行われているアートプロジェクトは、主流としては美術館主導ではなく、民間ベースの自発的なものが多いです。その仕掛けに美術館が関わったり、文化振興の行政がお金を出してやっています。「横浜トリエンナーレ」とか「越後妻有アートトリエンナーレ(新潟)」とか、あとは瀬戸内海で行われている「ベネッセアートサイト直島」などは泊まりで行かないと見られない。アートと観光が結びついて、DESTINATION・キャンペーンのアート版のようなことになっています。越後妻有などは里山の過疎地でイベントを始め、その結果としてアートセンターのような拠点ができていきました。いろんなタイプの社会とアートの結びつきかたが生まれています。

ただ、アートの質を保つという意味では、ミュージアムや専門のキュレーターの果たす役割が大切です。金沢21世紀美術館、十和田市現代美術館、国際芸術センター青森のように、体験する芸術というものをミュージアムのなかに取り込んでいくような新しいタイプのミュージアムが、これから求められるのではないかと思います。また、地域の資源を活かしていくアイデアをアーティストと一緒に考えていくことにより、地域の産業の付加価値を上げることも、地域振興にもなるし、新しいアートを創造するきっかけにもなると思いますね。

先生がこれからやっていきたいことはどんなことでしょうか。

社会とアートを結ぶ活動、いわゆるパブリックアートと呼ばれているものの研究を続けていきたいです。具体的に言うと「アートパーク」という、芸術と公園が一緒になったジャンルがあり、世界的にも増えているんです。日本での先駆けは箱根にある「彫刻の森美術館」。そこは自然環境とアートが一体になった新しい形のミュージアムです。これができた当時は、まだ森のなかにある彫刻を鑑賞する場という感じだったんですが、今や芸術作品は鑑賞するというよりは、環境と自分が一体となって体験するものになってきています。その一番大規模なのが、イサム・ノグチが設計した札幌の「モエシ沼公園」。ここは「大地を彫刻する」というコンセプトでデザインされており、公園全体がアートであるなかで遊んだり、ピクニックができる環境なんです。ほかにも帯広の「十勝千年の森」など、新しいアートパークが世界中に増えているので、ヘリテージツーリズムやカルチャーツーリズムに役立つよ

う、そういうもののツアーガイドを作りたいなと思っています。

まぼろし読者へアドバイスをお願いします。

お子さんにはとにかく本物に触れさせること。インプットがどのくらいあるかによって、アウトプットの「質」が変わってきます。無からの創造はできませんから、インプットをたくさん、それもリアルな体験をたくさんすることでしょうね。美術として鑑賞するものだけがアートではありません。五感でものを受け止める力とか、それが基本だと思うんです。額縁絵画を見ることから、地場の工芸品を食器として使うことまで、ある意味すべてアートなんです。だからトレーニングするというものではなく、好奇心を持ってリアルなものにいろいろ触れていくチャンスを作ってあげれば、五感が敏感になり、あとはおのずとついてくると思います。

